

鷹の目の狩人

VIII

結果の出た事実が歴史

しろはく古地図と城の博物館富原文庫
代表 富原 道晴

ある機関紙の巻頭言に、「結果の出た事実の重なりが歴史である」と書かせていただいた。歴史に学ぶことによって、新事業に挑戦するリスクを低減しようとの提言であり、それは多くの危機を回避する有効な手段といえる。先人に学ぶという温故知新の意味は、人生にとって、まさにバイブルである。

歴史は正しいか、歴史は勝者によって改竄されていることも事実であり、それもまた、結果であるといえる。戦国時代の英雄たちに蹂躪された地方の歴史は伝わらないし、石田三成は江戸時代を通じて悪者にされ、明治の時代は幕末の歴史が改ざんされた。勝てば官軍という思想も歴史の事実であるが、正義感がそれを認めてくれない。判官びいきという言葉が生まれる所以である。国家も政権も企業も勝ち残ってこそ、その能力を発揮できるが、そこに、大義、人を引き付ける名分が必要となる。幕末の偽勅事件は大義を悪用した典型と言える。

中国孫子の兵法が連綿と今日まで伝えられた。戦わずして勝、話し合いといえば聞こえがいいが、調略、裏切りの下剋上の時代であった。それでも多くの戦史において調略が多大な人命を救ったことは事実であり、戦いを避けるという大義で、多くの人々が殺戮されたのも戦争である。多くの人民や国家にとって、戦争は望まなくてもやってくる。

勝者は政権維持のために、孫子の兵法や甲州流軍学に加えて、心の面では武士道精神として、倫理を養生し、

もっとも強力な武器である鉄砲を卑怯とした。武の面では人民を士農工商、刀狩、検地によって掌握し、また、敵対勢力は元和一国一条令、武家諸法度、大名資格制等によって、手伝普請、参勤



孫子十三計・竹簡模型

交代、新規築城禁止、大船築造禁止等によって敵対勢力の消耗を促した。

幕末、諸外国に対抗するための多くの政策が政権を崩壊させた。大型船舶の築造、海岸台場1千基の構築、数千の台場備砲である大砲の築造、洋式銃による農兵採用による国民皆兵体制、それらは、いみじくも巨大な対抗勢力を創造し、指導者の優柔不断もあり幕府を崩壊させた。人は成功よりも失敗から学ぶものだとすると、幕末の政変は多くを教えてくれる。幕末の歴史が見直されるのは戦後であり、近年、ようやく明治政府側の見方でなく、諸外国の資料の解明も行われつつある。幕末、対馬や小笠原が占拠された時代が忘れられているように思えてならない。

歴史から学ぶものが何か、その重荷に驚愕する日々である。大海の中から、歴史の事実を見つけることは非常に難しい。埋もれた歴史の発掘にロマンを感じる一方で、滅び去り、消滅し、何も伝えない歴史の裏側を垣間見るとき、戦慄する思いを抱くこともある。歴史の限界とは何か、深淵を覗く思いがある。

「世に身生きて、心死するものあり、身亡びて魂存するものあり、心死すれば生きるも益なきなり、知りて行わざるは即ち知らざるなり」大義に生きる難しさ、人に求めるのでなく、自ら何ができるか、大災害に人は無力を感じざるを得ないが、それでも、何ができるか、自問自答せざるを得ない。人生を生き切る、瞬間を生きる、後悔のない人生は理想である。改変された歴史の中に真実を求める旅は人類永遠か。コレクターの夢か。



江戸時代の孫子兵法書